



# 氷

— ふるさどで見つける涼 —

旧暦の六月一日を「氷の朔日」と呼ぶのをご存知でしょうか。

これは、中世の公家社会において、この日初めて「氷室」の氷が群臣に分ち与えられたことによります。氷室とは、真冬にとった氷を夏まで貯えておく室（むろ）のことで、その氷で暑い夏に涼をとったそうです。山陰に穴を掘り、茅などでその上をおおって氷を保存していました。

明和町にあった斎宮寮では、「水部司」という職掌が氷室を管轄していました。

御巫清直の『斎宮寮考証』には、「祭神ハ主水司ニ准セサルニカ、但氷室神ハ氷池神ニ准シテ祭ルカ、主水式ニ、凡供ニ御氷一者、齋内親王起ニ五月一盡ニ八月一日別一顆、トアリテ京ヨリ運送セシニコソ。」とあり、五月から八月までは、斎王に毎日氷ひとかけらを供したとして、その氷は京より運んだと説いています。

当初は、斎王のために氷を京や大和から運んだのかもしれませんが、地元で氷の調達が可能になったようで、伊勢神宮一二五社のひとつ、玉城町山神の「鴨神社」をはじめその近くには、氷室に関する地名・字名が残っています。

斎宮寮の氷室は周辺に相当数あったと思われる、そのいくつかが玉城町のひんやりとした谷間に設けられていたことが想像されます。

また、六月一日は、古くは富士山などから出る氷餅を食べて祝う風習があったそうです。

朝熊岳の萬金丹葉舗野間家の「安永五年 野間家年中扣（ヒカエ）」六月朔日の記録に、「六月 朔日 一佛神<sup>江</sup>氷餅備<sup>ル</sup>家内中戴<sup>ク</sup>」とあり、またお歳暮としても配ったことが所々に出てきます。朝熊山において野間家が氷餅を造り販売していたことがわかっています。

さて、現在の伊勢で「氷」といえば赤福氷を思い浮かべる方も多いのではないのでしょうか。

昭和三十六年、二見浦の海水浴客にと考案されたのが始まりだとか。

今や伊勢っ子の夏に欠かせない風物詩となっています。

- ❁ 三重県玉城町史 上巻 (玉城町史編纂委員会/編 玉城町 L243/夕/1)
- ❁ お伊勢さん 125 社めぐり (伊勢文化舎/編 伊勢文化舎 L174/オ)
- ❁ 神宮神事考証 中篇 (御巫清直/[著] 吉川弘文館 L174/夕/8)
- ❁ 伊勢郷土史草 第11号 (浜口主一/編 伊勢郷土会 L243/イ/11)